春風秋雨相

江利川毅　県立大理事長

オバマ氏の広島演説

非核へ「一歩」の継続を

原爆を投下したアメリカの現職大統領の広島での演説。その歴史的意義の大きさに比して、演説は淡々と語り掛けるような穏やかな口調であった。英語力がないので同時通訳で内容をフォローしたが、同時通訳では演説の格調が伝わらない。後日、新聞で全文を読み直す。

■平和の価値

演説の中に「我々（われわれ）は広島に来る」という言葉が初めと中盤と終盤に出てくる。追悼のため、道徳心を呼び起こすため、愛する人のこと（平和の価値）を考えるため。この言葉が演説の節目をなしているように思う。

初めは「10万人を超える日本の男性、女性、子供たち、数千人の朝鮮半島出身の人々、捕虜になった十数人のアメリカ人を追悼するため」とし、彼らの魂が我々の内面に語り掛けてくることを聞こうと訴える。そして文明の歴史が戦争で満ちていることに触れ、キノコ雲が人類の持つ矛盾（人類たらしめる能力が大きな破壊力を生み出したこと）に触れ、科学の進歩と同様に道徳の進化が求められると語る。

だから「我々はここ（広島）に来る」と述べる。つまり、あのひどい戦争、過去と未来の戦争の罪なき犠牲者全員に思いを寄せ、そして被爆者（演説の中で「ヒバクシャ」と言及）の声を聞くことができなくなる日が来ても、1945年8月6日朝の記憶によって道徳的な想像力がかき立てられ、変わることができるようになるのだと語る。さらに和平への歩み、核兵器廃絶に向けた歩みに触れ、核保有国は核兵器のない世界を目指す勇気を持たなければならない。人々も同じ人類として互いのつながりを再び考えるべきだと訴える。

■WeとI

そして全ての人間が持つ豊かな価値や、あらゆる生命が貴重であり、我々は人類という一つの家族の一員であると語り、愛する人のことを考えるために「我々は広島に来る」と語る。人々は科学は生命を奪うためにではなく生活をよりよくするために使われるべきだと考えていると述べ、国家やリーダーの選択にこのシンプルな知恵が生かされる時、広島の教訓は生かされると締めくくる。

結びはひときわ格調が高い。「世界中の子どもたちが平和に過ごせるようになる。それが我々が選びうる未来だ。その未来の中で広島と長崎は、核戦争の夜明けとしてではなく、私たちの道義的な目覚めの始まりとして記憶されるだろう」

演説は、We（我々は）を主語にしている。人類全体のあるべき論を語り、人類全体の責任を語る。オバマ大統領は我々の右代表として語り、かつ大統領を含む我々が責任の主体であるということなのだろう。I（私は）という主語は一度も使われていない。私個人に関わる文脈は「私が生きているうちにはこの目標を達成することはできないかもしれない」という1カ所だけである。そのあとの安倍総理の演説が「昨年、私は米国を訪問し…」と始まるのと比べ演説の視点の違いを感じる。

■小さな積み重ね

余談であるが、冒頭の「空から死が降ってきて」の表現に少し違和感を持った。辞書でdeathを調べると、dを大文字のDにすると死神という意味になる。この意味の方が文脈に合うのではないかと思ったが、その後、新聞に加筆修正した原文が載り、小文字であることが判明。私の推測は当たらなかった。

演説の前に原爆資料館を見て回り、自ら作った折り鶴を置いてきたこと。演説の後に2人の被爆者の側に歩み寄り、握手し、肩を抱きしめたこと。その行動が極めて自然で、オバマ大統領の真心や人間性が感じられ、全体を通じて素晴らしさが際立った。

この訪問をどう生かすか。北朝鮮や中国がそばにあって地政学的には厳しいが、日本なりに核兵器なき世界に向けて行動していかなければ、この訪問を生かせない。大きな一歩が難しければ小さな一歩でもいい。継続は力なり。「世界の広島」であるためにも、小さな一歩を積み重ね続けることが大事だと思うのである。（次回は7月18日付）